



Title	Authorityを委ね合う : 「ひきこもり」のライフストーリー研究を通して
Author(s)	石川, 良子
Citation	日本学報. 2025, 43-44, p. 44-52
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/101371">https://hdl.handle.net/11094/101371</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【特集】

## Authority を委ね合う

— 「ひきこもり」のライフストーリー研究を通して —

石川 良子

### はじめに

本稿では私が 25 年近くにわたって行ってきた「ひきこもり」のライフストーリー研究について、調査対象である当事者たち<sup>1</sup>とのせめぎ合いを Shared Authority を導きに振り返る。語りの Authority は語り手と聞き手（研究者）との間で共有されているという前提に立ちつつ、調査過程のある局面では一方が Authority を強く主張し、また別の局面ではもう一方が強く主張することがあること、長い目で見れば Authority を互いに委ね合いながら調査者と調査対象者の関係が育まれていることを示してみたい。

なお、私は現在、日本オーラル・ヒストリー学会（JOHA）の会長を務めており、シンポジウム当日はその立場から JOHA の紹介をしてほしいというご要望をいただいた。そこで本稿でも JOHA の紹介から始めることにしたい。

## 1. 日本オーラル・ヒストリー学会(JOHA)について

### (1) 概要

日本オーラルヒストリー学会（JOHA）は、「口述史資料を扱う日本の研究者だけでなく、ジャーナリストをはじめ口述記録を収集してきたさまざまな分野の実践者が、国内外へ情報を発信し、ジャンルを超えて相互交流し、方法論を研鑽して理論研究もできる場」として 2003 年に設立された<sup>2</sup>。

設立準備委員会のメンバーは 10 名。そのうち 9 名が女性で、歴史学・地域女性史・家族史など専門領域は多様である。また大学に所属せず在野で活動している者も多かった。学術研究としてのみならず、自らが生きるための実践として歴史と向き合ってきた人々が中心になって立ち上げられた学会と言える。また設立にあたっては、オーラル・ヒストリ

ーとは政治家などの「公人」を対象とするものであると定義した御厨貴 [2002] への対抗も意識されていた [桜井 2013]。いずれにせよ、歴史の表舞台から排除されてきた人々の声から歴史を紡いでいくことへの強い思いが、JOHA の根底にあることは間違いないだろう。

2003 年 9 月に開催された設立記念大会には 120 名余りが参加し、会場は熱気に包まれていたという [吉田 2013]。ある会員は大会当日の様子について、たとえば「戦争体験をテーマにしている人がいるなら、自分も発表したい」という在野の人、ジャーナリスト、インタビューに協力した人など、じつに様々な人々が集い、アカデミズムの枠に囚われない自由さがあったと振り返る<sup>3</sup>。設立初期から現在まで継続されている研究実践交流会・ワークショップは JOHA の“名物”とも言えるが、そこでは参加者たちがオーラル・ヒストリーにまつわる様々なことを車座になってざっくばらんに語り合う。その光景は JOHA の自由さ・多様さを象徴するかのようである。

現在の会員数は 300 名を超えており、最近はとくに大学院生・若手研究者の新規加入が相次いでいる。今後は若手の育成にも力を入れ、ともにオーラル・ヒストリーの魅力を味わうことのできる仲間を増やしていきたい。

## (2) 私自身と JOHA との関わり

私自身の専攻は社会学で、フィールドワークを基盤にライフストーリー研究を行っている。おもな調査現場は「ひきこもり」である。「ひきこもり」は家族以外の対人関係が長期にわたって失われている若者たちの問題として、2000 年代初頭から注目を集めるようになった。近年は高年齢化が進んでおり、50 代・60 代になった当事者たちの生活困窮など、問題は深刻化している。私自身は 25 年ほど前から現場に関わるようになり、当事者にとって「ひきこもり」とはどういう経験なのか追究してきた。そして、それと背中合わせに、ひきこもった経験のない私がいかにして当事者の経験を理解できるのか、できるとするならば“理解する”とはどういうことなのかを問い続けている。

JOHA に入会したのは 2008～09 年頃だったと思う。設立準備委員会のメンバーでもある社会学者の桜井厚が主催する研究会に参加し始めたのが、ちょうど JOHA の設立時期と重なっていた。そのため、JOHA の存在は当初から知っていたが、いわゆる歴史研究に携わっているわけではないので入会を躊躇っていた。しかし、研究仲間からあれこれ聞くうちに、「フィールドワーク・聞き取りに携わっている人たちの集まり」というように緩やかに捉えるようになっていった。社会学者の小林多寿子は、JOHA に寄せられている高い関心は「『ヒストリー』を問うことよりもむしろ『オーラル』への注目のあらわれであるのではないかと、設立 5 年目の大会シンポジウムの趣旨のなかで指摘している。まさに私が JOHA に参加する理由・動機もここにあり、JOHA が多様な専門領域にまたが

る学際的な学会に発展してきた背景でもあるだろう。

なお、ここ数年の私自身の JOHA に対する認識は、「語りを慈しむ人たちの集まり」というように更新されている。あくまで個人的な見解だが、語り手となった人々が生き抜いてきた（今まさに生き抜こうとしている）手触りを語りから感じ取り、その手触りにどうしようもなく惹かれてしまう人たちが集い、キャリアや立場の違いに囚われることなくフラットに交流できる場が JOHA である（そうあるべき）と考えている。

## 2. ライフストーリー研究の概要

ここで言うライフストーリー研究は、桜井 [2002] が基本的な枠組みを示したものである。源流は 1970 年代にリバイバルされたライフヒストリー研究に求められる。桜井 [2022] によれば、語りの時系列編成・事実性を重視するのがライフヒストリー研究であり、ライフストーリー研究ではライフヒストリーを基礎としながら口述性を重視する。すなわち、語り手自身の言い回しや語り口、会話の脈絡、語り手と聞き手の関係性などに着目し、「語り手が『何を語ったのか』という語りの内容」とともに、「いかに語られたのか」も読み解いていく [桜井 2002: 28]。桜井は従来の「何を語ったのか」という問いの上に「いかに語ったのか」という問いを追加し、私はそこにもう一段「何のために語るのか」という語り手の意図や関心を付け加えることを提案してきた [石川・西倉 2015, 石川 2015]。また、語り手の理解には聞き手である研究者の常識や価値観、暗黙理の前提などの「構え」 [桜井 2002] を明らかにすることが不可欠とされ、それゆえ聞き手を前にした感情的な反応も含めて、研究者自身の経験を自己言及的に記述していくことになる [石川 2012]。

以上を踏まえ、私なりにライフストーリー研究を定式化すると次のようになる。ライフストーリー研究は、語り手として目の前にいるその人が、いかにして今のその人になったのか、これまでの人生・暮らしの足取りを辿り、語り口や言い回しにも着目しながら、聞き手として向かい合っている私に対して、どうしてそのことを、そのように語ったのかを読み解き、それを通して語り手の〈ライフ〉とともに、その〈ライフ〉を成り立たせている時代・社会を描き出そうとするものである。なお、ここで言う〈ライフ〉とは、字義通りの人生・暮らしに加え、その人をその人たらしめているもの——人生・暮らしを方向づけている価値観、生きることや自分という存在への意味づけ、原動力や行動原理など、これら全てをひっくるめたものを含意する。

さて、ライフストーリー研究が登場した背景に目を向けると、まず 1980 年代の人類学者たちの自己批判に始まる実証主義批判、および 1990 年代後半からの構築主義の隆盛に伴う言語と相互行為への注目の高まり、そして大学の大衆化に伴う研究者の権威の失墜や、当事者学・当事者運動の盛り上がりも関係している [石川 2012]。また、桜井の主要

なフィールドが被差別部落であることも重要だろう。「ひきこもり」もそうだが、自らの声を軽んじられてきた人々の現場に分け入ろうとする際には、どうしても「お前は何者だ」「なぜ自分たちを研究の対象とするのか」「お前は何を知りたいのか」という厳しいまなざしと向き合わなければならない。研究者も社会を構成する一員であり、客観的・中立的ではいられない。そういった自覚を強く迫られる状況に対する一つの応答として、ライフストーリー研究を位置づけることができるだろう。

### 3. 語り手とのせめぎ合い——Shared Authority との関わりで振り返る

#### (1) 「ひきこもり」×ライフストーリー研究

「ひきこもり」の当事者と長く関わるなかで、かれらの社会に対する様々な憤りに触れてきた。ある人は「私たちは専門家と言われる人たちに好き勝手に語られてきた」と、自分たちの声が奪われてきたことへの怒りや悔しさを語った。では、かれらの声を奪うのではない研究のあり方とは、どのようなものなのか。上記の語りは、自らの Authority を無視され、占有されてきたことに向けられているとも捉えられる。しかし、専門家が当事者に語りの Authority を share すればよいというものでもない。この人に言わせれば、「もともと私たちの経験なのだから、それを語る Authority を専門家に share してもらおうなどというのは、全くもっておかしな話だ」ということになるだろう。

ところで、今でこそ私も「ひきこもり」の専門家の 1 人に数えられるようになったが、調査を始めた当時は大学院に入りたてのひよっ子だった。専門家の書いたものからは当事者の姿が見えないというのが、フィールドワークを始めた大きな理由の 1 つである。「本を読んでも分からないから直接会いに行こう」という単純素朴な考えで現場に入ったが、それは茨の道の始まりだった。「自分たちをモルモット扱いするのか」「引きこもったことのないお前に何が分かる」といった当事者たちの怒りと反発に直面し、はじめのうちは驚きと戸惑いに翻弄されるばかりだった（他方、そのような当事者たちの反応を目の当たりにしたからこそ「かれらを自分の人生・経歴の踏み台にしているのか」という疑問が生まれ、一度関わった以上は簡単に現場を離れてはならないという覚悟が促されたのも確かだ）。

この頃は Shared Authority の概念を知らなかったが、そうした当事者たちの感情的反応に晒され、この語りは誰のものなのか、かれらの語りをもとに書いた文章の著者は誰なのかといった疑問が、いつも頭のどこかにあった。フリッシュ氏が指摘するとおり、語りの Authority は専門家が人々に share するものではなく、本来的に語りとは share されているものである [Frisch 1990]。2000 年代に研究の道へ進み、ライフストーリー研究に携

わってきた私にとって、語りとは語り手と聞き手が共同で生み出すものであるということとは当然の前提になっていたが、あくまで学術の文脈においてそう言えるというだけで、語り手を目の前にそのように断言できるかということ、言葉に詰まる感じがある。

さて、そもそも語りの Authority とは何なのだろうか。その意味するところは曖昧というか多義的であるように思う。また、語りが生み出されるインタビューの現場だけでなく、語りの解釈、出版、出版後の活用など、オーラル・ヒストリー実践の様々な局面で Authority を捉えていく必要があるのではないか [e.g. Sitizia 2003]。以下では私が「ひきこもり」のフィールドワークで経験した語り手とのせめぎ合いを、Shared Authority との関わりで振り返ってみる。

## (2) エピソード①——語りの解釈

ある語り手に原稿の公開許諾を得ようと確認をお願いしたところ、公開を拒否されたことがあった [石川 2014]。だいぶ記憶は薄れてしまったが、こんなことを言われた。「私はこんな話はしていない。ここに描かれているのは、およそ私とはかけ離れた人物だ」。これに対して私は「これはあくまで私の聴いたあなたであって、あなたそのものではないことを分かってもらえないだろうか」と返したが、「言っていることは分かるが、こんなものが出回って、私がこういう人物だなんて思われたら困る」と跳ね返された。それでも食い下がって何とか修正の機会を与えてもらったが、なかなか納得してもらえない。最終的には、私がいかに語り手の経験を受け止めきれていなかったのかを前面に押し出すことで許諾を得ることができた。その原稿を見せたとき、「こうやって自分のことを素直に書いてくれるのがいい。研究者は自分の話をしないから嫌なのだ」といったようなことを言われたような覚えがある。

相手を理解できない自分を掘り下げることなくして、相手を理解することはできない。このことを学ぶ機会を与えられたと思う一方で、いまだに釈然としないものがある。どうすれば相手に納得してもらえるのかを強く意識しながら、文章を修正していった苦味が消えない。語り手からの信頼を失いたくなかったのはもちろんだが、就職前で1つでも多く業績を出さねばならない（そのためには公開許可を得なければならない）という必死さもあったことは否めず、それが苦味として残っている。いずれにせよ、語り手に向けた「これはあくまで私の聴いたあなたであって、あなたそのものではない」という一言は、今は Authority を譲ってほしいという聞き手（研究者）からの懇願願とも取れる（いや、内心は Authority はこちらにあるという主張だったかもしれない）

私は現場と協働で調査を立ち上げたことはなく、基本的に自分が知りたいことを知るために、現場にお邪魔して話を聞かせてもらってきた。問いを立てるのは調査者である私であり、相手の協力を得られるのは私の関心や意図を理解してくれた場合に限られる。相

手の尊厳を損ねるようなものは決して書くべきではないが、ただ言うなりになって修正する（もっと言えば自分の解釈を曲げる）のも違う気がする。語りの解釈においては、ある程度 Authority を委ねてもらわないと困る。これが正直なところだ。原稿に赤が入ることもあるが、自分の語ったことの細かな言い回しやニュアンスは修正しても、解釈の部分には一切触れてこない人に対しては、逆にありがたいと思う。聞き手・書き手として信頼され、Authority を認めてもらったように感じるからだろう。

### (3) エピソード②——私が当事者の経験を語ること

「専門家と言われる人たちに好き勝手に語られてきた」と憤りを示した人のエピソードである。その人に博士論文をもとにした書籍 [石川 2007] を読んでもらったところ、「こんなに分かっているとは思わなかった」という感想をもらった。そう言われて喜ぶより前に、びっくりしてしまった。というのも、当事者には共感しなければならないという規範に長らく振り回され、かれらの経験を自分の枠組みに当てはめようとしているだけになっていたことに気づき、「自分には当事者のことは分からない」と認めることから改めて始めようと思って書いたものだったからだ。

さらに「あなたたち研究者には私たちの声を翻訳してほしい」と伝えられた [石川 2009, 2021]。ここでの「翻訳」の意味については改めて検討したいと思うが、私が当事者のことを書いても、それは「好き勝手に」自分たちのことを語ってきた専門家たちとは違うのだと言ってもらえたようで、戸惑いながら嬉しくもあった。また、今から2～3年ほど前に同じ人に原稿の確認をお願いしたところ、「別に見なくていい。だって石川が書いたんだから大丈夫でしょう？」と返ってきた。さらに別の人から、「石川さんは当事者じゃないのに、自分たち以上に当事者のことを分かりやすく語ることができるね」と声をかけてもらったこともある。この機会にこうしたエピソードを改めて振り返ってみると、当事者たちにかれらの経験を語る Authority を与えられたということだったのかもしれない。

### (4) エピソード③——調査対象について発信し続けること

私が「ひきこもり」の調査を始めた2000年代初頭は、圧倒的に当事者の声が不足していた。かれら自身が自らの経験を十分に言語化できなかったという側面もあるが、むしろ語ったとしても聞き届けられず、専門家などの声にかき消されてしまうという側面のほうが強かった。その頃はいつもインタビューの最後に「なぜ依頼を引き受けてくれたのか」と尋ねるようにしていたが、それに対して「自分の経験を広く伝えてほしい。私たちを代弁してほしい」と答えた人がいた。かれらに代わって語るということは、私自身がかれらの声を奪う側に回ることになりかねない。ただ、そのときの「代弁」という言葉は、「発信する回路を持っているあなたに自分たちの声を託したい」という思いから発せられた

もののように思われた。

ここから 10 年以上が経って 2010 年代半ばになると、当事者たちが表舞台に立ち、イベントやメディアを通して社会に広く自分たちの声を届けようとする機運が高まった。当事者自身が語れるようになったというだけでなく、かれらの声に関心を傾けようとする周囲の耳も育ったということなのだろう。自分の苦しみを言葉にすることができない、自分の苦しみは取るに足らないもののようだから言葉にしても仕方がない、自分の苦しみをいくら語っても聞き届けてもらえない——こうした〈語れなさ〉の苦悩〔石川 2021〕と格闘し、長きにわたって言葉を耕してきたかれらの語りは説得力に満ち、そして味わい深い。どこか優しくもある。

かつてはインタビューで聞いたことをそのまま書くだけでも重宝がられたが、そんなことをする必要はもはやない。私はもう表立って語らなくてもいいだろう。そんな気分になっている。言ってみれば、当事者の経験を語る Authority をかれらにお返しするような心持ちである。

#### 4. 「歴史を描くのは誰か」

語りは語り手と聞き手が共同で生み出すものであり、その意味において Authority とはもともと share されているものである (Shared Authority) 〔Frisch 1990〕。したがって、たしかに語り手と聞き手は双方ともに語りの Author である。しかし、研究者が起点になって行うインタビューにおいて先に呼びかけるのは研究者であって、相手はその呼びかけに応じたときに語り手=Author として立ち上がる 〔小林 2000〕。語りの解釈においては Authority をある程度まかせてもらわないと困るという感覚は、語り手と聞き手としての出会いが自分の呼びかけによって始まったものである以上、その出会いを通して生み出された語りに責任を持たなければならないという感覚と繋がっている。

また Sharing Authority に関しては、やはり専門家が人々に Authority を share するという考え方はおかしいと思う。しかし、本報告にあたり自分の調査を振り返ってみて、調査過程のどのあたりに立っているのか、相手とはどのような関係性にあるのか、その関係性をどのように築いてきたのかといったことによって、語り手のほうが Authority を強く保とうとする局面もあれば、その逆もあることが見えてきた。つまり、語りの Authority はどちらか一方が持つものではなく、またどちらか一方に固定されるものでもない。単に share されているわけではなく、語り手と研究者 (聞き手) はそのときどきの局面や状況に応じて、自らの Authority を主張する。そこだけ取り出すと両者は対立し争っているようだが、モノサシを長くとれば Authority を互いに委ね合っているように見えてくる。そして、このせめぎ合いを通して相手との関係性を育まれてきたという実感がある。



先ほど当事者に語りの Authority を返上したいという心境になっていると述べたが、とはいえ実際には講演や研究報告を続けている。おそらく今後も、当事者の語りをもとに「ひきこもり」について発信することを完全にやめることはないだろう。そして、もちろん現場との信頼関係が保たれている限りにおいてだが、当事者の経験を語る Authority を不当に取り上げられるようなことも、おそらくないだろう。今はそのように思える。20 年以上を経て、ようやく語りの Authority を当事者たちと share している地点に辿り着いたと言えるのかもしれない。

注：

- 
- 1 「ひきこもり」は一般的に“家族以外の対人関係が長期にわたって失われている状態”と定義されており、これに当てはまる人が当事者とされる。しかし、現場には必ずしもこの状態にないにもかかわらず当事者を称する人が少なくない。これを踏まえて私は“自らを「ひきこもり」の当事者として規定している人”を当事者と捉えている。
  - 2 JOHA ホームページより (<http://joha.jp/category/about>)。
  - 3 2024 年 7 月 23 日に立教大学で開催したライフストーリー研究会での発言より。

【参考文献】

【和文】

- 石川良子 2007『ひきこもりの〈ゴール〉——「就労」でもなく「対人関係」でもなく』  
青弓社
- 石川良子 2009「『分からないことが分かる』ということ——調査協力者への共感をめぐって」『質  
の心理学フォーラム』1 巻 2 号（質的心理学会）
- 石川良子 2012「ライフストーリー研究における調査者の経験の自己言及的記述の意義  
——インタ  
ビューの対話性に着目して」『年報社会学論集』25 号（関東社会学会）
- 石川良子 2014「ライフストーリー研究に何ができるか——10 年間の足跡をたどりながら」『日  
本オーラル・ヒストリー研究』10 号（日本オーラル・ヒストリー学会）
- 石川良子 2021『「ひきこもり」から考える——〈聴く〉から始める支援論』ちくま新  
書
- 御厨貴 2002『オーラル・ヒストリー——現代史のための口述記録』中公新書

小林多寿子 2000 「2 人のオーサー——ライフストーリーの実践と呈示の問題」 好井裕  
明・桜井厚

編著『フィールドワークの経験』せりか書房

小林多寿子 2008 「特集にあたって」『日本オーラル・ヒストリー研究』4 号（日本オー  
ラル・ヒ  
ストリー学会）

吉田かよ子 2013 「日本オーラル・ヒストリー学会（JOHA）設立大会を振り返って」  
『日本オー

ラル・ヒストリー研究』9 号（（日本オーラル・ヒストリー学会）

桜井厚 2002 『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』せりか書房

桜井厚 2013 「熱意と多様性の——JOHA 創設前後」『日本オーラル・ヒストリー研  
究』9 号

（日本オーラル・ヒストリー学会）

桜井厚 2022 「〈2021 年度文学部講演会 講演録〉ライフストーリー研究はおもしろい——  
インタ

ビューの対話性と語りの多元性」『フェリス女学院大学文学部紀要』57 号（フェリ  
ス女学院大学文学部）

#### 【欧文】

Frisch, M., 1990, *A SHARED AUTHORITY: Essays on the Craft and Meaning of Oral  
and Public History*, State University of New York Press.

Sitizia, L., 2003, “A Shared Authority: An Impossible Goal?” *Oral History Review*,  
30(1).